

## 巻頭言

みんなの AI  
より良きパートナーとなるために

植野 研

((株) 東芝 研究開発センター システム技術ラボラトリー)



2020年を迎え、自動運転、業務効率化、商品推薦なども高度化し、これまで思い描いていた未来想像図がじわじわと現実のものとなりつつあります。筆者が大学の学部時代にAIの1分野である機械学習の研究室の門をたたいたのは約20年前、冬の時代が長くてAIという言葉自体が禁句とまでいわれるほどの時期もあり、連日、新聞・各種メディアでもAI関連の話題には事欠かないことに大変驚いています。シンギュラリティの議論などあって、AIはすっかり身近な存在となっており、いわば、“みんなのAI”となりつつあります。一方で、AIに雇用を奪われるのではないかと、といった不安や、AIが暴走するのではないかとといったリスクについても多く語られるようになりました。このような背景の中、筆者は現在、本学会総務理事を担当させていただき2年目になりますが、さまざまな方との議論の中で、(1) 実社会においてAIをどう“手なずける”か、(2) 初学者や他分野の方のいかに興味や関心をもってAI分野に入ってもらえるか、(3) 次世代のAI技術の創出を担う子供達にいかにしてアウトリーチしていくか、の3点が切実な課題であることを身に染みて再認識しています。

AIを手なずけるには、AIをどのように訓練・学習・強化させていくか、AIに法整備や倫理観といった人間社会の掟をいかに守らせるかがますます重要になってくると思います。各種AIのもつ得意・不得意の両面を良く知ることが肝要です。AIにもさまざまな種別があり、それぞれの利用上の制約や技術的な限界とこれからの発展可能性、適用先の技術面やコスト面とのすり合わせも大事な側面です。特に、日本では、少子高齢、人口減少のトレンドにおいて、今後、仕事や日常生活で、AIを良きパートナーにするスキルが求められていくでしょう。情報リテラシー、データリテラシーに続く、AIリテラシーなる教養が、一般の方にも求められてくるように思います。

また、本学会では、初学者や他分野の方々がAI分野に入りやすいように、堤富士雄理事をリーダーとしてAIマップタスクフォースを立ち上げ、学会ホームページにてAI技術の俯瞰図を作成・公開しています。さまざまな発展を遂げてきたAI分野の技術を四つの観点から作成したAIマップβ版は、まだまだ改良の余地がありますが、おかげさまで、2019年度の全国大会にて大変ご好評いただきました。他分野との融合がAI分野で進んでいることを考えると、これまでのAIの歩みと、これまで数十年にわたり培ってきたさまざまなAI技術を俯瞰しマップに収めることが真に求められていることを痛感しました。筆者が作成に関わった、基礎～手法～応用の技術分野を俯瞰的に示したマップCは、初学者の方が何をキーワードに勉強を進めていけばよいかのヒントになるだけでなく、既知のAI技術では対処しきれない場合に、実務者が、応用から基礎に向かって周辺や根っこにどのようなAI技術があるかを辿れるようになっており、コスト低減や新価値創造の実現に向けて、新たなAI技術を生み出すヒントを得るためにもご活用いただけるのではと考えています。

子供達がすでにデジタルネイティブであることを考えると、AIとの付き合い方については、幼少期から学ぶ必要があるかもしれません。本学会では、アウトリーチの活動の一環として、編集委員長の市瀬龍太郎理事が主導する連載「教養知識としてのAI」という漫画を連載しておりますが、これにとどまらず、大学の一般教育はもちろん、高校・中学・小学校、幼稚園に至るまで、AIを人間社会のより良いパートナーにするためのAIネイティブの育成に向けた教育プログラムが必要かもしれません。今後、学会としても、各機関ともぜひ連携しながら、人間社会における協働パートナーとしてのAIについて議論を深め、提言などに結び付けていければと考えております。

2020年は、東京オリンピック・パラリンピックの開催のみならず、人工知能分野では、国際人工知能会議IJCAI-PRICAI 2020が横浜にて開催される予定であり、立て続けに日本が世界から注目を浴びています。課題先進国である日本が最初のグッドAIパートナー推進国となるべく、学会としてもさまざまな角度から貢献できればと考えております。ぜひ、今後とも、学会活動へのご理解・ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。